

水澤成肅編纂

小學初等

修身幼訓

卷三

吹	本	教	育	會	書	館
第	二	第	二	第	二	第
四	二	四	二	四	二	四
函	架	架	架	架	架	架
五	四	四	四	四	四	四
冊	號	號	號	號	號	號

東新

百一第

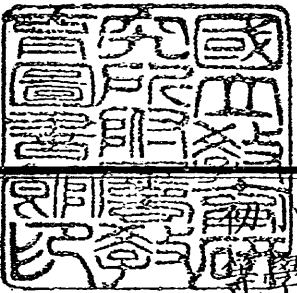
K110.1
49
3

木澤成肅編纂
蒲生重章校閱

卷三

小學
初等
修身多訓

明治十五年三月廿八日版權免許

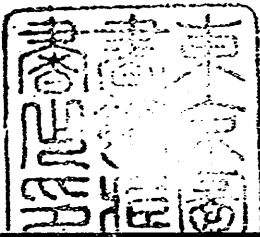


修身幼訓卷の三

第七

木澤成肅編纂
蒲生重章校閱

○言忠信、行篤敬、なるときと、蠻貊の邦
と雖も、行はれん、言忠信ならず、行篤敬
ふらざれば、恥と、州里と雖も、行をきん
や論語



小學初等

修身幼訓卷三

○をのまて人我志らばむ、毀るべからず、
 我れ礼人を志らば、譽むるに及ばず、
 のまに有りて、人よ求む、三のもれ、を能
 れ我志れる人の、人なりと云ふ、藤原氏種遠訓
 ○今の人恩恵を受けても、多く記省せ
 ざ、人よ惠む所あまじ、微物と雖ども、亦
 歴々心よ在り、古人言ふ人よ施しては
 念ふ勿れ、施我受けても忘る、袁氏世範勿きと

○仁言は、仁心の誠よ如かば、近を利を
 るも、遠我利すれ、此博お如らず、仁言或
 へ口に失し、近を利をふ、或は姑息よ幾
 か、宋李邦獻ノ格言
 ○鰥寡孤獨の四此者も、窮して告るな
 きの人なり、尋常饑寒の者に比せまじ、
 更よ矜むべし、故ふ仁を施さへ、必ず斯
 此四の者を先きよ、習是編

○人と交るに、人の財を費さしむべからば、人此費を厭はずして、己の費をあらんふと欲せば、人此費を以て我が樂とをるあり、賤むべし、凡此等の事は、心術を完うまべし、家道訓

○均しく是人あり、游惰かまじ弱なり、一旦困苦をまば強となる、意に慍へど柔なり、一旦激發すれば剛とふる、氣質

の變化をること此此如し、言志録

○遊び友達をえらぶべし、俗語にも朱子交まば、赤くおれやいふて、善人に交れば、善となる、悪人とまじらば、悪とおれなり、林子平ノ格言

○凡そ事を作るに、始を謹み終を慮まじ、過寡く悔少し、故小事を作ると、先づ思ふ、思はずして、輕率に事を作せむ。

必ず過ちあり、過てば必ば悔あり貝原益軒ノ格言

○道徳ある者は必ば多言せず、信義ある者ハ必ば多言せば、才謀ある者も必ば多言せば、惟夫の細人狂人妄人乃多言をる此み明、蔡虚齋ノ格言

○子弟たるものも、第一小父兄及び長者の申を事をよく聞うけて、少しも違背せば、義理と恥を専よして、毎事に

骨をこみ致す處うらば林子平ノ格言

○形體殘缺の人、痴愚聾瞽瘖瘂の窮民も、欺き侮りて、戲弄をべからば、形容して談笑す處うらば、當よ其、五官四體全からざるを念ひ、宜しく急小施濟すべ

習是編

○天下に甚し難事なし、若し己れを度りて取り、才を量りて授くまば、事の

濟らざれあし、聾者聲に循ひ、瞽者火燄
司る此若きは、爲さざる非ず、是れ能
とざれなり 省心襟言

○富と貴とは、是人此欲する所なり、其
道を以てせずして之を得れども、處らざ
るをり、貧と賤とは、是人の惡む所あり、
其道を以てせずして之を得ざり、去ら
ざるなり 論語

○仁を以て宅とあし、禮を以て門とな
し、義を以て路となし、是は居處し、是は
出入し、是に踐履をれども、安ぞ之を君子
と謂ざる夫とを得んや 省心襟言

○命に非るもの莫し、順て其正を受く、
是故に命を知る者も、巖牆の下に立ど、
其道を盡して死する者は、正命あり、極
措して死を執る者は、正命に非ざるなり
孟子

○輕しく發言を聴くとたゞ安人の譖訴は非ざること知らん、當に忍耐三思をべし、事は因て相争ふときも、我が是ふあらざること知らん、須く平心は暗想をべし 朱子ノ格言

○主人の奴婢を使ふ、常に禮法を嚴しくをべし、禮法忽せたまはし、悔りて罪を犯し易し、故は彼をして悔らず、怠らし

めざるは要をべし、然れども不慈にして、彼を苦むべからず 家道訓

○志立たざれども、天下成るべきの事をし、百工技藝と雖ども、未志は本づらざる者あらば、志立たざれども、舵なき舟、銜おたの馬に如し、漂蕩奔逸、何の底る所あらんや 王陽明ノ格言

○惻隱の心も人皆有る、羞惡此心

は人皆こま有り、恭敬の心も人皆大れ有り、是非此心は人皆これあり、惻隱の心も仁なり、羞惡此心は義なり、恭敬此心も禮あり、是非の心も智あり 孟子

○君子ハ禍を大れ患とふ、辱をこま畏ふ、盈一と爲し、善を見ては、吾之と與かるとを得ざるを恐れ、不善なる者を見ては、其己不及むとを恐れ、是故に

君子は利を以て見、辱を思ひ、惡を以て諾を思ひ、嗜欲恥を思ひ、忿怒患を思ふ 大戴禮記

第八

○船は櫓楫といふものにて、大海を渡るあり、人は正直に心を持ちて、世に交ふべし、櫓楫なくば、船ありとも、大海を渡る難しや、人正直あらば、思の外に難あり 平時頼ノ遺訓

○力餘りあれば好事を行ひ、力足らざ
 まど好心を存せ、力足らずして勉めて
 好事を行ふ、真に是好事あり、力餘りあ
 りて徒ら小好心を存せるは、好心と謂
 わざ也 習是編

○人一たびして之を能くせざば、己は
 百たび人十たびして之を能くすれ
 ば、己之を千たびに果して此道を能

せば、愚かりと雖ども必だ明よ、柔なり
 と雖ども必だ強 中庸

○毎日夙よ起きて、家庭を掃除し、先づ
 父母の氣色を候ひ、飲食の好む所を問
 へ之を進め、求るあらば之を奉じ、勉め
 て其歡心を盡さべし 貝原益軒ノ格言

○世間行く處として、意を拂る事なき
 も無し、一日として意を拂る事あるは

無一、惟度量寛弘かまじ、受用の處あり、
彼此局量褊淺かる者も、空しく自から
懊恨する此み 呂叔簡ノ格言

○人も一生のうちをのまひ是なふ此
道成よくなきべきと、おもひやりて、萬
事をや免て、一事成れ去らばかまじと
死も、かならず天下の多からとなるべ

藤原政忠遺訓

○忠孝を以て、子孫に遺はれ此も昌え、
智術成以て、子孫に遺はれものは亡ぶ、謙
を以て、物と接れば強なり、善を以て自
ら衛まば良なり 宋李邦獻ノ格言

○君子の人に接る禮讓を以てせ、故に
争ふ所あり、夫れ才能を争ひ、功業成争
ひ、權力を争ひ、意氣成争ふ、皆小人の爲
を所、禮讓の道に非ぞ、且禍を取る此道

あり 具原益軒ノ格言

○人口は開けど、皆能く禮義を談じ、名節を論じ、利を見る所及で、必ず趨り、勢は見て、必ず附く、又禮義名節の何物たるを知らざる也 明薛敬軒ノ格言

○孔子曰く、身をおもひ、親は枝なり、敢て敬せざらんや、其身は敬せらるるべし、能くされば、是を其親を傷つく、其親は

傷くまじ、其本は傷くれば、枝は從て亡ぶ 禮記

○主人は一家の模範あり、我能く勤め、衆何ぞ敢て惰らん、我能く儉ならば、衆何ぞ敢て奢らん、我能く公ふれば、衆何ぞ敢て私せん、我能く誠ならば、衆何ぞ敢て偽らん 願體集

○權家の奴僕は、主人に權威を挾みて、

賓客は侮り易し、主人たる者、時々心を用ゐて無禮を戒むべし、奴隸の無禮は責むるに足らず、賓客恚りて其主人を誹るに至るべし家道訓

○孝悌忠信を土臺とを教ふや、勿論あり、其次の禮義廉直智仁勇、此の七をよく心得べし、何れも人の身持の七、よく守りて、其上に心正しく、身持

立派なふやうにあり度事なり林子平ノ格言

○學者固より當小勉強して、懈らざるべく、又須らく心志を寛舒よし、精神を愛養すべし、此の如くなれども局促な態なく、從容な象あり、二ツの者並び行むれば相悖らざるべし貝原益軒ノ格言

○人の常情多く己が能ふ矜り、多く人此過言ふ、君子は然らず、人の善を揚

げて、己が善に矜らざ、人此過をゆるして、己が過をゆるさず 明太祖ノ格言

○賢者の狎れて之を敬し、畏きて之を愛し、愛して其惡しを知らず、憎みて其善きを知り、積て能く散らば、安きふ安んじて能く遷る、身は修め言を踐む、之は善行と云ふ行修りて言道あり、禮の質也 禮記

① 人生世に於て、未だ心力を勞せざれば

者あらば、或も心は勞して力を勞せば、或は力を勞して心は勞せず、若し心を勞せざ、又力は勞せざれば、乃ち饑草無用の人あり 紳瑜

○我身富貴ふして、威勢あまきとて、人をいやし、み阿まどおべからば、諸人よ憤らま、恨をうくまき、災難家にきたるまを、あねん 平時頼ノ遺訓

○他人をいやし免れぬのれをたはふも
此もかあらば至愚此人曲なり人はそ
のやぐしよ言行有べた事ふぞ達人の
一言ふてその人たふるやいへばげよ
とげかき事にたふ 藤原教房遺訓

○仲由と過を聞くことた喜びて、令名
窮りあし、今人過あれど、人此規をたふと
を喜ばど、疾た護して醫を忌むが如し、

寧ろ其身を滅せとも、悟るふとあし 周子ノ格言

○言た以て人を傷つくたものは、利ま
たや刀斧の如し、術た以て人を害する
たの、毒虎狼此如し、言慎しまざるべ
きんや、術擇ばざるべけんや 宋ノ李邦獻ノ格言

○智と目の如し、能く百歩此外た見て、
自うら其、睫を見ふたと能くせず、故よ知
た此難き人を見ふよ在らどして、自

から見ふ小在り、故に曰く、自から見る、之、韓非子 明と謂ふ

○易に曰く、天道を満つるを虧くと、又古語よ曰く、多く藏むれば厚く失ふと、蓋し多く財を聚めて、人の貧苦を救へざらば、必ぞ其財失ふに至ら家道訓

○幼くして肯て長し事へば、賤くして肯て貴ふ事へず、愚にして肯て賢し事

へば、此も是人の三不祥なり、總て是傲氣害た爲そのみ、世人先づ傲氣除去せば、纔し事を成を得べし知世事

第九

○孝弟忠信の身は在るは、猶金玉寶貨此室小在るが如き、擴めて之を己に行ふは、猶發して人よ施をがごとし、豈美からばや、放棄して求を知らず、埋藏

して用ゐられ、我知らざれば、是誰の過ぞや省心

○輕情、二此者も、學を爲その大病あり、

輕き者も未だ得ざる我、以て、既に得る

と爲し、情る者は悠緩ふして、進む六と

能はず、張子曰く、輕きを矯め、情るを警

むと貝原益軒ノ格言

○宋の邵康節、其子伯溫に告て曰く、汝

固より當り善我爲るべし、亦須らく力

度量り、以て之を爲るべし、若し力度量

らざれば、善と雖ども亦爲すべからず

○君子の師を隆んぶして、友を親しみ

以て、其賊我惡むと我致し、我に諂諛を

る者の賊也、善を好むと厭ふ事なく、諫

我受て能く誠めば、進む事無らんと欲

と雖得むや同上 荀子

○後世美質、須らく誨養深厚あるべし、

天道を翕聚せざれば、發散せらるること能
 むべし、況んや人をや、花の千葉ある者ハ
 實か、其英華泄き盡くるが故なり
 ○君子ハ其位に素して行ふ、其外哉願
 せず、富貴よ素して富貴哉行ひ、貧賤
 よ素しては貧賤を行ひ、夷狄よ素して
 夷狄哉行ひ、患難に素してハ患難を
 行ふ、君子ハ入るとして自得せざれと

とあし中庸

○日日小新よとせらる者ハ、一日と一日
 の工夫あり、一歳と三百六十日此工夫
 あり、若し積て十年よ至らざ、其長進せ
 る所測るべからば、故小學者ハ日々よ
 新た小を致とを貴ぶ 貝原益軒ノ格言
 ○人の書哉借らざ、汗損せべうらず、屋
 漏烟煤油膩猫鼠盜火等の防きを爲す

べし、借れる書も、筐笥に置た、見る時、方りて、之を貸出すべし、若し汗損せば、補繕して、其過を謝し、之を返さべし 家道訓

○高年の人事を、作さずと、嬰孺の如き有り、錢財に微利を得るを喜び、飲食果實の小惠を喜び、孩兒と玩狎を、其喜び、子弟たる者、能く此を知りて、其意に順へども、其歡を盡さべし 袁氏世範

○大事小事、小はけて、善た事あらば、必悪しき事、何れぞと、來らぬさたふ、思ひまうけたはふべし、又悪き事、何れとて、あなづちに歎く事と、愚痴のいよまふり 平時頼の遺訓

○洪自誠曰く、耳中常に耳小逆ふの言を聞き、心中常に心小拂ふ此事あり、纔よ是徳に進み、行を修むるの砥石なり、

若し言々耳は悦び、事々心を快くせば、便チ此生を把て、鳩毒の中は埋むるあり
菜根談

○數十卷の書を読むとあきむ、便チ自から高大ふして、長者は凌忽し、同列を輕慢し、人之を疾むとと讎敵の如く、之を惡むこと鴟梟に如し、此のごとたむ、學を以て益を求め、今反て自ら損を

學ぶとあたふ如く、をふなり
顏氏家訓

○人の書を借らむ、我が書は閣き、先づ其書を讀み畢り、之を返さべし、疾く之を返せども、人にも亦貸さむや、我惜まず、書を人にも貸さむ、我が用缺くることあり、是を以て自から省み、借れず物も、久く留め置く處らば
家道訓

○富貴の地は處ては、貧賤は痛癢を知

らんことを要し、少壯此日、當てハ、須らく衰老此辛酸、茂念ふべし、安樂此場よ居て、當よ患難人の景況を體をべし、旁觀の地、小處て、局内人此苦心を知らん、去とを要を昨非庵日纂

○子弟ハ孝悌忠信を土臺よして、義理と恥とを專らとをるやう、小育つる、孝悌忠信からざれば、人道立ど、一身修

まらざ、恥なり、義理と恥とを專らとせざれば、身持見苦しく、萬事手前勝手のみ致をなり林子平ノ格言

○善を爲さず、人の知る去とを求めざ、恥者、之を陰徳と謂ふ、故よ其施し廣し、其恵み博し、其恵を博けせば、天の報ひ必だ豊かなり、是故小聖人譽れ、茂要むる事を惡む、君子は姑息を恥づ省心襟言

○陳了翁間居と雖ども、容止常は莊敬なり、苟も言致發せば、一日家人と語る、家人戲きよ問ふ、是實ありや否やと、公退て自ら責るふと累日なり、曰く、吾豈小人を欺くことあるか、何為れぞ此問ひあはれや 劉氏人譜

○禮義廉恥、以て己致律はべし、以て人を繩さべからば、己を律すれば、過ち寡

し、人を繩せど合ふと寡し、合ふことや寡けまば、世を渉る此道よあらば、大のゆへよ君子と己を責め、小人は人致責む 省心襟言

○人の得意此事あるを見て、便ち當さよ忻喜の心致生どべし、人の失意此事あれを見て、便ち當さよ憐憫の心致生ずべし、成を忌み、敗致樂むも、何ぞ

人此事に預らん徒らに自から心術を
壞るのみ 昨非庵日纂

小學修身幼訓卷の三終

明治十五年三月廿八日版權免許
同十五年五月出版

定價八錢

編纂人

東京府士族

木澤成肅

下谷區下谷西町壹番地

出版人

同 士族

辻謙之介

本郷區本郷元町壹丁目六番地

出版人

同 平民

阪上半七

日本橋區吳服町十二番地

發兌人

同 平民

北畠茂兵衛

同區通壹丁目



